

News Letter No.12

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies

Contents

■プログラムコーディネーターからのメッセージ ■ユニット長からのメッセージ ■GSS教員からのメッセージ
■博士論文研究基礎力審査 (QE) の実施 ■GSS実習報告会の開催 (2015-2016) 及び今年度のスケジュール (2016-2017)
■第5回GSS国際アドバイザー会議 (GIAC) ■産学連携イベントの実施 ■GSS履修生の紹介
■GSS 海外フィールド実習 (シンガポール) ■エチオピア国際学術交流 (国際スクール) 2015.10.27-11.3 ■編集後記



プログラムコーディネーターからのメッセージ

寶 馨 防災研究所教授



グローバル生存学大学院連携プログラムは、京都大学の9つの大学院研究科と3つの研究所が連携し、安全安心分野の新たな学際領域である「グローバル生存学 (GSS = Global Survivability Studies)」を開拓することを目指す5年一貫制の博士課程教育プログラムです。この大学院連携プログラムでは、専門性に優れ、社会的俯瞰力のあるタフな国際的リーダーたるべき人材を育成することを目指しています。「タフな人材」とは何でしょうか？ たとえば、「どこでも寝られる」、「何でも食べられる」、「誰とでも友達になれる」。これらは海外のあらゆる状況に対応できる「タフな人材」に求められるものと言えましょう。

産学連携イベントについて

GSSは、社会で活躍する国際的リーダーの育成を目指しているため、産業界との連携を重視してきました。今年3月には産学連携ワークショップが開催され、学外の産業界関係者とGSSの学生・教職員の多数が参加し、交流が行われました。詳細は「産学連携イベントの実施について」をご参照ください。

国際学術協力について

GSSでは、安全安心分野における国際的な学術交流を進めています。今回はエチオピアにおける学術交流について紹介しています。詳細は「エチオピア国際学術交流 (国際スクール) 2015.10.27-11.3」をご参照ください。

ユニット長からのメッセージ

塩谷雅人 生存圏研究所教授



昨年度よりユニット長を仰せつかっていましたが、この4月からの新たな任期につきましてもユニット長を引き続き務めることになりました。よろしくお願いいたします。

GSSプログラムでは様々な研究科の教員が連携し、安全安心分野において社会のリーダーとなる人材の育成に向けた幅広い活動をおこなっています。今回のニュースレターでは「教員からのメッセー

ジ」の記事として、工学研究科の木村教授から「貧困削減と向き合う」というタイトルで、GSSの観点から見た「人々の暮らしを守り豊かにする研究」について紹介いただきましたのでご参照下さい。

本プログラムでは教育の質を保証するため、修士課程を終えるGSS本科生に対して博士論文研究基礎力審査 (QE: Qualifying Examination) を実施しています。単に博士論文を書く資格があるかどうか、その準備ができているかどうかを判断するだけでなく、GSSの教育理念を理解し実践しているかどうかをチェックする重要な評価のタイミングとなります。このQEの詳細については「博士論文研究基礎力審査 (QE) の実施」を参照して下さい。

GSS教育プログラムの中でもユニークかつ重要なものとして5つの実習系科目があります。フィールド実習や産学連携プロジェクトなどを学生が自ら計画して実施し、最終的にはそれらを通して学んだ成果を取りまとめて報告会で発表することが義務づけられています。昨年11月には第11回、今年2月には第12回目の実習系科目報告会がおこなわれました。その様子については「GSS実習系科目報告会の開催」で紹介しています。また、GSSプログラム側が大枠を準備するタイプの実習系科目も用意されています。その一つが、昨年度シンガポールで開催されました。「GSS海外フィールド実習」で紹介していますのでご覧下さい。

GSSプログラムでは国際的に活躍する専門家によって構成されるGSS国際アドバイザーを中心に、年に1回GSS国際アドバイザー会議を開催しています。昨年度はさる1月に「エネルギーと環境」をメインテーマとして会議がおこなわれました。今回の会では特に、学生が中心となって会議の企画・運営に携わり、GSSプログラムを一層充実させるための活発な意見交換が行われました。詳細は「第5回国際アドバイザー会議」をご参照下さい。

このニュースレターでは毎回GSSプログラム本科生の皆さんの紹介をおこなっていますが、今回は10名の学生さんについて紹介します。また今年度 (平成28年度) 新しく加わった学生さんについて簡単に紹介しますと、L1 (1年生) としてはプログラム履修者 (予科生) として14名の合格が、3年次からの編入生 (予備生) として2名の合格が決定しました。これら新しくGSSに参加することになった学生みなさんに祝意を表するとともに、今後このGSSプログラムの中で国際的に活躍するリーダーとなるべく研鑽されるように期待したいと思います。

なおGSSプログラムの活動内容など最新情報は以下のウェブサイトをご参照下さい。

<http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp>

GSS教員からの
メッセージ

木村 亮 工学研究科社会基盤工学専攻教授



貧困削減と向き合う

私は工学研究科の土木工学を専門とする研究者で、土の力学を調べています。構造物を支える基礎に力が作用した時どのような挙動をするのか、トンネルを掘るときにどのように掘ればよいのか、などを主に研究してきました。ここでは私の「グローバル生存学」的活動を紹介します。

1993年にケニアで実施されていた JICA の大学造りのプロジェクトに参加し、3ヶ月間学生や講師に土の力学を教えました。アフリカの水が合ったのか風景や人々を好きになったのか、それから毎年のようにアフリカを訪問しました（現在 73 回訪問）。2000 年から「アフリカの研究者が見つけた知恵を用いてアフリカの貧困削減に寄与する」というプロジェクトに新たに参加しました。プロジェクトを指導する立場の人間が口だけで、貧困削減に対し行動できないと話にならないので「2 年間の時間をください。具体例になる工学的研究活動を私がお見せします」とほらを吹いてしまいました。

土木工学は「人々の暮らしを災害などから守り、豊かにする」ことが重要な目的です。農村部に雨季に行くと未舗装の土の道路が泥濘化した部分があり、通行しにくいのです。唯一の解決法は「運転手以外車から降り車を押すこと」です。道を直すことで、今まで道が悪くて市場まで運べず腐らせてしまった農作物を現金化でき、貧困削減になると考えました。

難しい技術ではなく簡単な技術で何とかしたい。高級な機械を用いて補修することは維持管理の観点からも持続可能な方法ではない。身の丈に合った方法として人力施工に限定すると、材料の素材を生かし道直しに使える材料として「土のう」にたどり着いたので。洪水時に建物への水の浸入を防ぐために並べたり、堤防の崩壊を防いだりする「土のう」です。泥濘化する部分に土のうを 2 段敷きます。ただし土のうは木槌を用い人力で締固めます。京大の宇治川水理実験所（現宇治川オープンラボラトリー）の敷地で、実際の敷設と走行試験も実施しました。考えた通り、車が走った後の轍掘れが土のうを並べると極端に小さくなりました。土のうにより道路面が固くなったわけです。2005 年に初めてパプアニューギニアの山岳農道に適用し、現在 25 ケ国に「土のう」工法を広めました。Low technology, Low cost, Labor base, Local material であるので 4 L 工法と呼んでいます。

研究者として活動する傍ら、2007 年に N P O 法人 道普請人



ケニア農村部における土のうによる道直し

（みちぶしんびと）を立ち上げました。キャッチフレーズは「自分たちの使う道は自分たちで直せるという意識を広げたい」です。「住民へのチャリティーから住民のビジネスへ」と、道直し技術を習得した農民や若者に小さな建設会社を設立してもらい、政府からの道直しの仕事を請け負えるようにしています。土のうによる道直しのマニュアル化や政府が気持ちよく道路整備を依頼できる環境造りを行っています。自然科学の研究者が社会科学の領域に入り、知恵を出し新たな解決法を生み出しています。例えば国際労働機関（ILO）との共同事業として、持続可能な開発に向けた若者の雇用創出プロジェクトをケニアとソマリアで実施しています。若者を取り巻く悪循環を若者の雇用創出で断ち切ることが途上国の喫緊の課題です。

世界銀行は、2030 年までに極度の貧困層を世界人口の 3% 以下まで低減する「極度の貧困の撲滅」目標を業務の指針として掲げています。1990 年に 19.26 億人であった 1 日 1.25 ドル未満で生活する極度の貧困層を、ミレニアム開発目標の実施により 2015 年には 8.36 億人まで引き下げたが、2030 年にはゼロにします。道を直せば市場にも行けるし病院にも行けるし、学校にも行けます。学校をいくら作っても、通学路が整備されていなければ意味をなしません。逆に学校建設は道のいいところにしか作られていません。私たちの道直しの解決法と学校づくりは共同できる活動です。貧困削減は過去数十年にわたり世界銀行のミッションの核をなすものであったが、今回は目標と達成期限を定めました。2015 年 9 月に設定された国連持続可能開発サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の存在が大きいです。

「人々の暮らしを守り豊かにする」ことを研究の原点とする研究者が、「グローバル生存学」の趣旨に則って実施する「世界の道直し」の活動に期待していただきたいです。

博士論文研究基礎力審査（QE）の実施

勝山正則 GSS 特定准教授

平成 23 年度に開始された「博士課程教育リーディングプログラム」は、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期が一貫する学位プログラムを構築し展開することにより、我が国の大学院教育の抜本的改革を推進するものです。世界に通用する教育の質を保证すべく、京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム（GSS）では、本学の博士課程教育リーディングプログラム運営委員会の定めた博士論文研究基礎力審査（QE: Qualifying Examination）に関するガイドラインに従って、今春に修士課程を終えた本科生に対して QE を実施しました。



口頭試問に臨む学生

平成 27 年度に対象となる学生には 2015 年 4 月に平成 27 年度 QE 実施要領を周知しました。QE は書類審査と口頭試問から構成されます。12 名の対象者は、修士論文等の要旨および博士後期課程における研究計画を提出し、口頭試問に臨みました。書類審査では、修士論文が GSS プログラムにおいて履修したこととどう関連しているか、今後の研究計画が GSS プログラムとどう関連するかに重点を置いて記述することが求められ、それらの観点からも採点審査されました。口頭試問は、1 人 25 分（発表 10 分、質疑 15 分）の持ち時間で、2016 年 3 月 1 日に、京都大学東一条館修館ホールおよび大講義室で行なわれました（写真は諮問の様子）。

提出書類や発表資料は全て英語、口頭発表と質疑応答も英語に限定され、ガイドラインの定める英語力審査を兼ねて実施されました。

昨年度までの反省もあり QE の意図・重要性は約 1 年前から周知しておりましたが、今年度も全員合格とはならない厳しい審査結果となりました。QE は大学入試や最終審査にも匹敵する重要審査ですので、来年度からは、実施要領を事前に十分理解して、審査対象者の学修成果と博士論文研究をすすめる基礎能力が遺憾なく発現されることを望みます。

GSS 実習報告会の開催（2015-2016）
及び今年度のスケジュール（2016-2017）

近藤久美子 GSS 特定准教授

2015 年 11 月 24 日、第 11 回 GSS 学生実習報告会が東一条館の 2 会場にて開催され、計 15 名の学生（5 研究科：アジア・アフリカ地域研究・理学・医学・工学・地球環境学）が従事したフィールドワークや国際共同プロジェクト等に関する成果を発表しました。ミャンマー・ペルー・ネパール・中国・ケニア出身の留学生もこれまでに修得したコミュニケーション・スキルを遺憾なく発揮し、全ての発表者（L1:3 名、L2:6 名、L3:3 名、L4:3 名）が合格判定となりました。各学生は報告会を通じて、複数の評価者（カリキュラム委員）より、有益なフィードバックを受けることができ、また eポートフォリオ・システム “GSSfolio (Karuta 1.1)” 上で合否判定を確認することも可能です。

学生数の増加と研究活動の活発化に伴い、第 11 回報告会の発表者数は、第 10 回報告会の約 4 倍となり、直近の報告会（2016 年 2 月 16 日に開催された第 12 回報告会）では、13 名の学生が参加しました。今年度も引き続き東一条館にて、計 5 回の実習報告会が予定されています（2016 年 5 月 31 日、7 月 19 日、9 月 27 日、11 月 29 日、2017 年 2 月 14 日）。

表：第 11 回 GSS 学生実習報告会（2015 年 11 月 24 日開催）（発表者・題目）

Lecture Hall (B1F)		
Name		TITLE
Ms. Sanae Ito	Field Training	Water Management Practices in the Kathmandu Valley, Nepal
Mr. Atsushi Yasumoto	Internship	Internship in the Nuclear Regulation Authority
Ms. Ei	Int'l Cooperation Project	Review of Teak Plantation Establishment by Taungya Systems in Myanmar and Thailand: A Historical Background to the Mainstream of Modern Society
Mr. Oscar R. Escalante M.	Internship	Bioinformatics: Whole Genome Sequence and Gene Sequence Analysis
Mr. Oscar R. Escalante M.	Int'l Cooperation Project	Prevalence of Pathogenic Strains of Vibrio Parahaemolyticus in Popular Shellfish Marketed in Peru in 2014 and 2015
Mr. Tomochiro Tanaka	Industry-Univ. Collaborative Project	Collaborative Research on Integrated Flood Risk Assessment with the Tokyo Marine Research Institute
Ms. Shobha Poudel	Field Training	Climate Change and Food Security in the Mountainous Region of Nepal: A Case Study of Lamjung District
Mr. Wenlong Wang	Field Training	Detection of Epigenetic Effect of Environmental Chemicals: Interdisciplinary Research of Biology and Computer Information Technology
Ms. Miki Yoshizumi	Int'l Academic Exchange	Int'l Academic Exchange: Lessons Learnt in Ethiopia
Lecture Room (2F)		
Name		TITLE
Ms. Hitomi Inoue	Field Training	Field Training in Myanmar
Mr. Taro Shiotani	Int'l Academic Exchange	GSS Int'l Academic Exchange, GIAC at Kyoto University
Ms. Ayako Kohno	Field Training	Learning Experience of Conducting Qualitative Research in Malaysia
Ms. Ayako Kohno	Int'l Academic Exchange	Int'l Conference in Singapore and Switzerland
Mr. Koji Uozumi	Field Training	Community-Based Organizations and Mutual Aid in Rural Areas of Cameroon
Ms. Anita N. Ongosi	Field Training	Clean, Green, Singapore
Ms. Shinomi Takahashi	Field Training	Lessons from Field Training in Singapore
Ms. Yongxue Shi	Field Training	Water in Singapore

第5回 GSS 国際アドバイザー会議（GIAC）

木原正博 医学研究科教授

第

5回GSS国際アドバイザー会議（GIAC）が、2015年1月21-22日に稲盛記念会館で開催されました。GIACは、学生参加の要素が毎年増えるという形で「進化」してきましたが、第5回GIACでは、教員の援助を得つつも、テーマ設定、セッション企画、ロジスティクスの準備、そして運営のほぼ全般を学生が主導するという意味で、学生参加のいわば「最終形」に近い意義深い会議となりました。また、メインテーマは、「エネルギーと環境」で、GSSには参加していないエネルギー研究科の協力も得て企画したもので、さらに学際性の深まった会議となったと思われます。また、参加者数を増やすために、早期から全学的ポスター掲示や出席の呼びかけを行い、最終的に、114名（うちGSS関係教員23名、GSS学生28名）が参加するという、これまでのうち最大規模のGIACとなったことも特記すべきことと思われます。

オープニングセッションでは、木原渉外委員長による開会の挨拶（GIACの歴史経過）、寛GSSプログラムコーディネーターによるプログラム概要の説明、塩谷 GSS ユニット長によるプログラムのカリキュラム内容とその成果の報告が行われた後、ポスターセッション内容の紹介として、発表者による「3分発表」が行われました。第1セッションは、メインテーマを概括する基調講演を中心とするものでしたが、第2-4セッションは、それぞれ「農業」、「技術革新、起業、政治」、「健康、社会」というサブテーマのもとに行われ、まず、学生が数か月かけて、そのテーマについて学習し考えたことの発表、それを受けて、専門家（加賀爪氏、Farzaneh 氏、Baum 氏）がそれを含む内容の講演を行い、その後、発表学生と専門家とのパネルディスカッションという形で進められました。これまでの専門家の一方的講演を聞くというスタイルからの大きな転換であり、どのセッションでも非常に活発でかみ合った討議が行われたことが印象的でした。最後のセッションは、「女性とリーダーシップ」というテーマで行われ、大和総研の河口氏、前滋賀県知事の嘉田氏、元国連大学長 Ginkel 氏の講演後、非常に活発で有意義な議論が行われました。そして、総括セッションでは、Ginkel 氏の総括コメントがなされ、第5回 GIAC に高い評価がなされ、最後に吉川渉外委員から、第5回 GIAC の準備に中心的に関わった学生メンバーの紹介があり、大きな盛り上がりの中での閉会となりました。

初めに述べたように、第5回 GIAC はほぼ全面的に学生主導によるものであり、昼食の準備、ソーシャルイベント（民族衣装・舞踏を含む歓迎会）など、細部にまで配慮の行き届いた会議となりました。国際会議の準備は、それ自体が共同プロジェクトであり、その成功は、企画力、実行力、英語力、リーダーシップなど、多面的な能力が必要とされます。今回の GIAC の成功は、この間の GSS の教育プログラムの中で、学生が着実に成長していることを示しており、GSS の目的が達成されていることを象徴する会議であったと言えると思います。



会議最終日のグループ写真



「女性とリーダーシップ」のセッション

産学連携イベントの実施

清水美香 GSS特定准教授

G

SSは、去る3月3日、産学連携ワークショップ「産学連携×「レジリエンスの未来」：レジリエンス・プロジェクトをデザインしよう！～安全安心をイノベーションする～」を開催しました（主催 GSS、共催 大成建設株式会社、協力 一般社団法人企業間フューチャーセンター、関西フューチャーセンター）。

今回の主眼は、「学生と企業人が有機的な対話をするためのセッション」を設け、「双方向のコミュニケーションを介し、背景や専門の違いなどの枠を取り払って問題解決にフォーカスし、共創により安全安心のための新しいプロジェクトを創り出すこと」に置かれました。学外企業または団体関係者、GSS 履修者・教員関係者あわせて総勢 50 名が参加しました。

最初に大成建設株式会社の小野真司氏と教員が「レジリエンス」についてインスピレーションセッションを行い、それを元にレジリエンスを軸にしながら安全安心社会のイノベーションをどうデザインするかについて、参加者がグループ毎に積極的且つ建設的な対話を重ねました。

参加者は普段周りにある枠を超えて問題解決のための対話をする意義を見出す機会になった様子で、一部から日常の取り組みに活かしていきたいといったコメントが寄せられました。GSS 履修者は日頃培っているリーダーシップ・コミュニケーション力を発揮し、対話をリードする姿が印象的で、今後の彼らの役割について頼もしい可能性を確信する日となりました。



ワークショップ風景

GSS 履修生の紹介

私

は、越境公共財ゲーム実験について研究しています。東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故では、中国で、“食塩ショック”が起こりました。塩が核物質等の汚染物質を取り除く効果があるというデマが飛び交い、需要が集中し、塩が買えなくなる事態が発生したのです。このことから、不確実な情報の元で、なぜ不合理な判断をするのか興味を持ち、人間の行動や意思決定の研究の重要性を意識しました。例えば、原発事故は、隣国にも影響を与える国を超えた災害で、人々の意思決定は、単純な条件でのアプローチからでは、検討が不十分です。そこで、私は、越境公共財ゲーム実験を用い、人々の協力関係、意思決定のアプローチを明らかにしたいと考えています。GSSは、学術的な面からだけでなく、国際的な実習系科目が豊富にあり、研究を深めるに当たって、広い視野を身につける貴重な機会となっています。



謝 梓君
シャ シン

経済学研究科
(L2)

人

ルシーな食事は健康な身体之源です。健康的な食べ物をバランスよく摂取しないと、糖尿病や心疾患などの生活習慣病を引き起こしかねません。私はケニアでの生活習慣病、特に食事に着目した研究を行っています。なぜなら生活習慣病は進行が遅いため、予防するチャンスがあるからです。また、低・中所得国では生活習慣病が原因で毎年約2800万人が亡くなっているため、私の研究結果はこれらの国でも活かすことができると考えています。私は、GSSに所属したことで、研究のためのより広いグローバルな視野を得ることができていることに感謝しています。例えば昨年度はシンガポールのフィールド実習で、素晴らしい政策は国民の良い生活習慣に貢献すること、またオーストラリアでのインターンシップ研修を通して、生活習慣病予防に寄与する分子生物学について理解を深めることができました。



アニタ・オンゴシ

医学研究科
(L2)

GSS 履修生の紹介

私 は現在の研究テーマは、糖尿病治療中断・継続の要因を探索することです。糖尿病治療を中断することは血糖値が高い状態を意味し、それは糖尿病合併症を引き起こす原因です。糖尿病合併症とは、失明や下肢切断、透析や腎移植が必要になる腎機能低下のことで、これらは患った本人だけでなく、家族や社会経済にとっても大きな負担となります。この研究テーマに至った背景は、看護師として透析室で出会った方々は糖尿病治療を中断した方が多く、またそのことをとても後悔していたからです。糖尿病と診断された方々が治療を継続し、糖尿病合併症を予防することが研究の最終目的です。その目的を達成するためにGSSで他分野について学ぶことは、糖尿病を医療以外の視点から考えることができ、とても有益です。GSSでの経験と研究の知見を生かし、社会に貢献していきたいです。

高橋 詩野美
たかはし しのみ
医学研究科
(L2)



現 在日本には約3000基のダムがあり、多種多様な機能を持って日本の安全安心を守っています。しかし近年上流から流下してきた土砂がダム湖内に堆積し、ダムの貯水容量を圧迫する堆砂問題が深刻になっており、さらには下流への土砂供給量の減少による河川環境の悪化も招いています。そこで私の研究は、ダムの長寿命化と下流河川環境の維持を両立したダムのマネジメント手法を確立することを目的としており、特にダムの堆砂を工学的に防止するシステムの効率的な利用方法を探ります。更にGSSを通して身につけた学際的な知見を活かし、様々なダム堆砂対策が経済学的、生物学的な面で持つ長所・短所の定量化、機能評価を行います。またこれらの問題は、現在未だダムの建設が活発なナイル川やメコン川といった海外の河川でも将来起こり得る問題であり、国際的にも究明が急がれています。

小柴 孝大
こしば たかひろ
工学研究科
(L2)



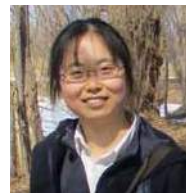
僕 は、アジアや西洋諸国の食育イニシアチブの範疇での教授法や食の政策の研究を行っています。端的にいうと、「どのように持続可能なフードシステムの構築に貢献しうる責任ある消費者になれるか？」について研究しています。GSSプログラムを通して、フランス・イタリア・韓国などにもフィールドワークに行き、味覚教育やコミュニティーアプローチの食育についても学ぶことができました。こうした活動を通して異分野間・多国籍間の研究協力の可能性も理解することができ、どう自らの研究に生かすことができるかも習得しつつあります。これらの研究は、2030年持続可能な開発に向けたアジェンダの中に位置付けられ、そこで研究できることを誇りに思います。食の学びは構造的ニーズであるからこそ、今後益々必要になってくると確信しています。その社会の潮流に遅れないよう、潮流すら生み出せるよう、本気で食育を研究していきたいです。

上田 遥
うえだ はるか
農学研究科
(L2)



私 は農学研究科の修士二回生で、農学研究科生物資源経済学専攻に所属しています。弁理士の資格を有している利点を生かし、植物遺伝子特許が農業者に与える影響について研究しています。特に米国における遺伝子組換え種子の使用を巡る、大手種苗会社のMonsantoと農業者の訴訟に着眼し、研究を進めています。研究を進めるにあたり、GSSプログラムは非常に有益です。他研究科の学生との交流により、経済学、法学、社会学など様々な分野から自身の研究を捉えることができます。また、フィールド実習やインターンシップ研修により、現場を重視した研究が可能となるだけでなく、国際学術交流や産学連携プロジェクトにより、研究成果を現場へ反映させる機会もあります。今後もGSSプログラムを最大限生かし、最終的にGSSが目標として掲げている食料安全保障に貢献していきたいと考えています。

岡田 ちから
おかだ ちから
農学研究科
(L2)



私 は小さい頃から釣りが好きで、今でも週末にはよく釣りに出かけます。中国の古い諺に「永遠に幸せになりたかったら釣りを覚えなさい」とあるそうで、確かに釣りは奥が深く、経験を積みほどこに楽しくなっていくような気がします。このような理由で私は、タイの外来魚問題を釣りという視点から研究しています。タイでも釣りは盛んで、様々な外来魚が、タイ国内に釣り対象魚として導入されています。魚を釣って研究というと、ゆるい雰囲気を感じられるかもしれませんが、日本のブラックバス問題からも分かるように、外来魚というのは実は深刻な影響を生態系に及ぼしています。タイでは魚類は重要なタンパク源であるため、GSSのテーマである食料安全保障にも直結してきます。外来魚問題というのは、立場によってメリット・デメリットがはっきり分かれる問題でもあるため、GSSで得た学際的な視点からその解決に役に立つと考えています。

古元 幹也
ふるもと みきや
アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)



私 はアジア・アフリカ地域研究科に所属し、タンザニアの稲作について研究しています。タンザニアはアフリカ屈指の稲作大国となっています。人口の増加にともなってコメの消費量は急速に増加し、現金収入を必要とする稲作農家は、水源湿地や河畔林などを開墾して1人当たりの水田面積を拡大しています。地球温暖化の影響で、雨季が短くなったり、干ばつが頻繁におこることによって今後益々、水田開発に拍車がかかるものと思われます。私の研究は、こうした気候変動も視野に入れながら、タンザニアの農村における土地や水などの農業資源の利用と管理のあり方を、生態環境・食糧・社会経済などの問題とあわせて学際的に捉えるものです。GSSプログラムには様々な分野を専門とする学者と学生が参加しています。彼らとの交流により、学際的でより幅広い視野を身につけようと考えています。

瞿 黄祺
ク コウキ
アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)



私 は人々の多角的医療行動と宗教変動との関係を明らかにすることを目的として人類学的研究を実施しています。私のフィールドであるベナン共和国では、他の多くのキリスト教圏のアフリカ諸国と同様に、妖術に対抗する運動やペンテコステ派やカリスマ派の教会が増加するなど、霊的な諸力を重視する宗教活動の興隆が報告されています。そしてその多くの宗教が治療行為を行っています。代替治療ともいえるこれらの宗教的治療行為と近代医療との関係を明らかにし、今後の医療の方向性を論じるためには、学際的な視角が不可欠です。そのため、私はGSSプログラムを通して、医学や経済学といった他の分野の見識を高めながら、より深く研究を進めていきたいと思っています。

村津 蘭
むらつ らん
アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L2)



イ ndonesia・ジャワ島では、発展に伴い貧富の差が拡大したことが原因で発生した貧困層の違法伐採が問題となりました。これに対し、インドネシア政府は、森林保全と現地の人々の経済収入向上の両立を可能にしようと住民に森林管理許可を与える制度を導入してきました。私はGSS活動として、昨年3か月間ボゴールに滞在し、関連の調査を行いました。ここでも上記の制度の元で森林保護のためにキャンプ場の運営などが実施されています。しかし今回の調査で、一部の住民だけの収入が増加している等、コミュニティの収入面の改善の必要性や、プロジェクトの持続可能性面で課題があることが判りました。再び調査で現地を訪れる際には、GSSで磨きをかけたコミュニケーション能力を活かして、地域の人々のニーズを的確に把握するためのデータ収集・分析を行い、コミュニティと政府の契約関係や森林管理プロジェクトの改善に貢献したいと思っています。

吉永 由美佳
よしなが ゆみか
地球環境学舎
(L2)



GSS 海外フィールド実習（シンガポール）

吉川みな子 GSS特定准教授

2

015年10月24日から11月1日にかけてGSSの実習系科目のひとつであるフィールド実習を開催しました。医学研究科・工学研究科所属のL1, L2, L4の合計5名の学生は、この実習を通じてシンガポール共和国政府による環境マネージメントの取り組みについて文献調査および臨地学習し、科学的データをもとにどのように政府が住民に環境の重要性を説いているかについて定量的・定性的データを収集し、以後学生自らが臨地調査を計画する能力を培いました。参加者それぞれの研究テーマを考慮し、政府機関を含む13か所の訪問、住民教育イベントへの参加、ビジネスディナーへの出席の機会を設け、10あるGSS目標のうちプロジェクトマネジメント、現実の世界的問題への対処、対人コミュニケーション、異文化交流、主体性の発揮について習得できるよう企画しました。詳しくは<http://gss-sv00.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/report/>にアクセスし報告集をご覧ください。

エチオピア国際学術交流（国際スクール） 2015.10.27-11.3

重田眞義 アジア・アフリカ地域研究研究科教授

エ

チオピアでのGSS関連行事の開催は2013年に続いて3回目になります。今回は、これまで共同研究や留学生受け入れを通じて京都大学との関係が深いアジスアベバ大学のエチオピア研究所、社会科学部社会人類学科、アフリカ・東洋研究センターとの国際学術交流を8日間にわたって実施しました。GSS 履修者5名（中澤芽依、善積美希、瞿黄祺、村津蘭、黄智暎）とアジスアベバ大学社会科学部の教員および修士課程学生が多数参加しました。担当教員の太田至と重田眞義（アジア・アフリカ地域研究研究科）、西真如（GSS）のほかに、田中利和（アフリカ地域研究資料センター研究員）と萩原卓也（人文科学研究所研究員）が運営に携わりました。学術交流は①臨地セミナー、②パン・アフリカン・セミナー、③アフリカフォーラム、④ポスター発表による院生交流会（写真）の4つの関連したプログラムによって構成されました。



アジスアベバ大学生に対して5人のGSS履修者がポスターで研究成果を発表した。1：村津 蘭 2：善積美希 3：瞿 黄祺 4：黄 智暎 5：中澤芽依

編集後記

4月14日21時半頃、私は東日本大震災により大打撃を受けた仙台空港に到着しました。その直後に21時26分に熊本県において発生した震度7の報を知ることとなりました。翌日から出席していた学会では、東日本大震災の教訓から、発災後に注意すべき感染症について議論が行われました。

本号の編集作業の開始とほぼ同時期にGSS 予科が始まり、日本の、そして世界の安全安心に取り組んでくれそうな予科生たちが、GSS 履修生として選ばれるために勉学に励んでいます。

第12号では昨年度新たにGSSに加わった学生10名の自己紹介に加えて、海外にて開催された2つの実習系科目の報告などを行いました。第5回となった国際アドバイザー会議におけるGSS 履修生の活躍ぶりからは、年々の成長が感じられます。とくに数ヶ月後に巣立って行くL5の学生諸君、「大志を抱け！」Be ambitious!

GSS ニュースレター（No.12） 編集担当 吉川みな子

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies

News Letter No.12

平成28年6月30日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町1
TEL 075-762-2197
URL <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>